

1. 日時：令和3年12月7日（火）8日（水）
2. 会場：滋賀大学 彦根キャンパス 講堂（滋賀県彦根市）
3. 募集定員：104名（一般：60名 福祉職従事者：16名 学生・新任者：8名・実践報告交流会：20名）
4. 参加人数：76名（一般：29名 福祉職従事者：9名 学生・新任者：11名）（講師：4名 関係者：23名）
5. 協力法人・機関：（社福）滋賀県社会福祉協議会（社福）グロー（社福）六心会 国立大学法人滋賀大学
滋賀県健康医療福祉部障害福祉課

昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大を受けて、当初9月に予定していた共生社会フォーラムの熊本での開催をやむなく延期しましたが、関係の皆様方のご尽力により、10月に北海道でスタートを切り、11月には、群馬県と熊本県で開催することができました。

12月には、全体フォーラムとジョイントする共生社会フォーラム in 滋賀を国立大学法人滋賀大学のご厚意により、世界遺産をめざす国宝彦根城下にある彦根キャンパスで開催する運びとなりました。開催前日の12月6日（月）には、全国フォーラムならではのインターネットによるリアルタイム配信の準備を会場となる講堂で行うとともに、メンターとして鳥取から応援に駆けつけていただいたNPO法人あかり広場副代表の渡部真哉さんとの打ち合わせを行いました。



ヘレンケラーさんも講演した講堂(1924年建築)

初日の7日（火）朝9時に協力法人の（社福）滋賀県社会福祉協議会のスタッフの皆さんが集合し、受付係や会場係などに分かれ、9時半開場までの限られた時間内に円滑な動きで準備が進められました。また、当日参集の助言者が加わり、兵庫県の西宮市社会福祉協議会から応援に来ていただいたメンターの皆さんと全体進行者によるプログラムの確認など、事前打ち合わせを行いました。

一般参加コースには、地元滋賀県のほか岐阜県、愛知県および山梨県にある福祉施設・事業所、社会福祉協議会、自治体等から29名に参加いただきました。研修には、中堅コースに滋賀県のほか鳥取県にある障害児者や生活困窮者への支援施設・サービス提供事業所から9名の参加があり、学生・新任者コースに滋賀県の福祉施設・サービス提供事業所、相談支援事業所などの職員8名と福祉専門職をめざす大学生3名の参加がありました。これらの参加者と全国から集結した運営関係者や助言者等の合計76名に参加していただきました。

また、コロナ禍による制約があるにもかかわらず、国立滋賀大学経済学部（中野桂学部長）はじめ協力法人には、事前の周知や準備、学習環境の整った会場の確保など、様々な面で行き届いた配慮をいただきました。



フォーラムは、厚生労働省の矢田貝泰之企画課長の挨拶で始まり、一般参加者と研修参加者とが共に参加するプログラムのオープニングとして、糸賀一雄記念賞第 19 回音楽祭の映像と湖南ダンスカンパニーによるパフォーマンスとトークがありました。

まず、糸賀一雄記念賞の受賞者を祝うことを目的に 2002 年度スタートした音楽祭の映像では、毎年、母なる琵琶湖を抱きしめるように人々がつながり滋賀県内で開催される「うた」「打楽器演奏」「ダンス・身体表現」のワークショップに参加する人たちのパフォーマンスと、総合プロデューサーの小室等さん、高良久美子さん（パーカッション）、谷川賢作さん（ピアノ）、吉田隆一さん（バリトンサクソ）、こむろゆいさん（ヴォーカル、ウクレレ）などのゲストミュージシャンによる演奏とのコラボレーションによるステージの紹介があり、障害のあるなしなど様々な垣根を越えたボーダレスで魅力あふれるステージを感じることができました。



次に、湖南ダンスカンパニーによるダンスパフォーマンスとディレクターの北村茂美さんによるトークが講堂で行われました。滋賀県湖南圏域に住む障害のある人とプロのダンサーや福祉施設職員が、共に踊り舞台をつくるアーティスト集団で、その人の個性や習慣、ついはいみ出してしまう行動をすべてダンスとして肯定するとして、毎月 2 回、ワークショップを行っています。ワークショップの積み重ねにより新作を発表するなど活発な活動を続けておられ、今年度の滋賀県文化奨励賞を受賞されました。「いのちに意味がある」をテーマとする本フォーラムのオープニングにふさわしく、コロナ禍を乗り越えて、命の輝きそのものが感じられるパフォーマンスを披露していただきました。



続いて二つ目のプログラムとして、NHK 厚生文化事業団の福祉ビデオライブラリーに昨年登録された NHK スペシャル・ラストメッセージ第 6 集「この子らを世の光に」（2007 年 3 月放送）を上映しました。日本初の公的福祉施設である「近江学園」の設立に尽力した糸賀氏と糸賀氏を支えた池田太郎氏や田村一二氏らの紹介と、今日の入所施設や地域での生活支援の取り組みの紹介があり、障害のある子どもたちと寝食を共にし、不断の研究と実践に基づき編み出された思想や残された言葉が、時代背景が異なるものの、現代の福祉に通じる普遍的なものであることを学びました。

私達一人ひとりが、やまゆり園事件やコロナ禍における差別事象に象徴される社会の問題を受け止め、課題解決に向かうためにも、時代を超えた普遍的な言葉や考え方を学び、身近な人々に伝えていくことが大切、ということを感じていただくことを願って午前中のプログラムを終えました。



午後からのプログラムは、3名の方々による鼎談方式のシンポジウムで、北九州市を拠点とするホームレス支援の活動で著名な奥田知志さん（NPO 法人抱樸(ほうぼく)理事長：第19回糸賀一雄記念賞受賞）、福祉支援語り部養成研修プログラムを開発した近藤紀章さん（NPO 法人とんがるちから研究所）代表理事およびワーキンググループリーダーの田中正博さん（一般社団法人 全国手をつなぐ育成会連合会専務理事）が登壇されました。テーマは「～いのちに意味がある～共生社会フォーラムで何を大切にしてきたのか～」です。

【発言項目】

- ①奥田さん「福祉とは何か」「生産性について」「物語・語り部としての福祉」
- ②田中さん「共生社会フォーラムの企画」
- ③近藤さん「研修プログラム」
- ④玉木さん「学生・新任者プログラム」
- ⑤田中さん「語り部育成」
- ⑥奥田さん「いのちと意味」
- ⑦近藤さん「メンター」
- ⑧奥田さん「糸賀思想」「物語としての福祉」
- ⑨田中さん「今後の共生社会フォーラムの展開」
- ⑩近藤さん「他分野と一緒に取り組む新たな展開」
- ⑪奥田さん「官民どもの縦割り、民間交流の必要性」
- ⑫近藤さん「言葉の現代に合った解釈」
- ⑬奥田さん「反対のかたち・語り部の醍醐味」



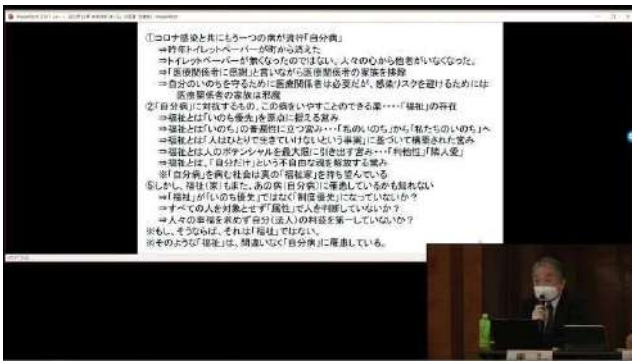
【詳細】

- ①最初に、奥田さんが「今日は、三つのこととお話する」と切り出されました。
 - ・一つ目は「福祉とは何か」について。
 - ・内村鑑三が1901年に書いた「亡国の民たり」で、自分だけ他人のことは顧みない「他者なき民」により国民精神が失せていると説いたが、現在の私たちのこの社会は、内村の言葉を果たして否定できるのか。福祉の現場が「抵抗の砦」となるのか、あるいは「片棒担ぎ」に終わるのが私たちは問われている。
 - ・コロナという病気は、全世界で流行り全員が当事者になった。この期に及んで一國主義というのは成り立たず、世界中全てが助からないと成り立たない。しかし、コロナの流行とともに、この国に非常に深刻な「自分病」が今蔓延している。これは内村の言葉からすると「他者なき」という事態。
 - ・「自分病」に対抗するもの、癒すことができるものの一つが、「福祉」あるいは「福祉の現場の存在そのもの」。糸賀先生の思想の根底にも同じことが言えるが、福祉とは、非常に単純に「命優先」ということ。命ということを原点に据える営みが福祉。
 - ・しかもこの命は、自分の命ということに限らず、単体では存在しない普遍的なもの。命を語るには、「私の命という主語」

ではもはや語ってはいけない。だから「自分病」では駄目。

- ・福祉とは何か。「人はひとりでは生きていけない、人間は弱いという事実に基づいて構築された営み」であり、人のポテンシャルを最大限に引き出す営みである。
- ・福祉とは、「自分だけという不自由な魂を解放する営み」である。しかし、私たちの足元の福祉は、ひょっとして「自分病」に罹患しているのではないか。福祉が命優先ではなく制度優先になっていたり、全ての人を対象とせず結局手帳があるかないかとかそういう属性で人を見てしまったり、人々の幸福を求めないで自らの法人の利益を優先する。そのようになっていたら、もはやこれは「自分病」に罹患している。
- ・二つ目は「生産性」について。
 - ・相模原の事件の特徴の一つは、いくつもの切り口がある。そもそも「福祉施設のあり方」も問われた。
 - ・彼は、良いことをしようとする確信犯だった。障害者を殺すということはみんなのためになる、公益のためにやると彼は、裁判のなかで言った。障害者は不幸しかつくりたくない。障害者は生きていても意味がない。意味がない障害者に税金を使っているのはみんなの迷惑なんだという考え方。だから障害者を殺すことによって社会貢献するというのが犯行の動機。
 - ・彼は、事件で「生きる意味のある命と意味のない命の分断線」を引き人を裁いた。一方で、彼との対話のなかで、あの分断線は彼が引いたのではなく、彼が引く前からこの世の中にあっただと感じた。意味のある命と意味のない命、評価を受ける人と受けない人、生産性の高い人と高くない人、みんなに喜ばれている人と喜ばれていない人、それらの分断線。
 - ・彼が引いた以前からあった分断線の「役に立つか立たないか」で言うと、彼は極めて役に立たない側にいたのではないか。これを一気に役に立つ側にジャンプするために、僕のことを評価してくれ、オレはスゴイ人間なんだ、必要とされる人間なんだ、ということを実証するために彼はやったのではないか。
 - ・その感覚は、多かれ少なかれ私たちのなかにある。福祉の世界でさえ、その感覚のなかに生産性があるかないか、生産性をどう高めるか、という議論のなかで私たちはやらざるを得ない現実を生きてきた。そうすると、彼が一人おかしな人だったのではなくて、彼はやっぱり時代の子だった。
 - ・今の社会全体が持っている生産性の圧力のなかで、多かれ少なかれ小さな彼が私たちのなかに棲んでいる。何か人と差をつけないと認めてもらえないという、そのプレッシャーのなかで生きてきた。そうすると、命優先の原則がやはり崩れていくのではないか。
 - ・糸賀さんは、生産性ということについて「この子らはどんなに重い障害をもっていても誰ととりかえることのできない個性的な自己実現をしているものなのである。人間と生まれてその人なりの人間となっていくのである。その自己実現こそが創造であり生産だ」と言われた。
 - ・しかし、糸賀さんがこの言葉を残してからもう何十年も経ったが、その先にあった私たちの社会は、自らの生産性の証明のために障害者を殺すという青年が、しかも福祉の現場から生まれ、非常に深刻な事態だ。
 - ・糸賀思想とのなかで立ち止まって考え、他者性や関係性あるいは社会化というもののなかで考える必要がある。
- ・三つ目は「物語・語り部としての福祉」について。
 - ・共生社会フォーラムは、福祉の現場のなかで日々起こっているさまざまな事柄を語り部として語っていけることを目指そうということで始まった。全く沈黙のなかで語っていく人もいるし、いろんな語り方があるが、そこには「物語」というものがある。
 - ・経済的な困窮を「ハウスがない」ということに象徴させてハウスレスと言う。「人との関係がなくなっている」ということをホームレスと言う。ハウスとホームは違うという考え方。このホームがなくなるといふことの最大の問題は、人との関わり・つながりがなくなるということで、そこに言葉が失われ物語が失われる。
 - ・人間が働く動機や意欲は、どのように生み出していくか。経済学の言葉をもとに、私は「内発的な動機と外発的な動機」があると思う。路上の人と長いこと付き合っ、自分の動機が失せてしまった人たちとたくさん会ってきた。人とのつながりがなくなると外発的な動機というものが失せる。この動機付けがなくなるといふことにもっと関心を払う必要がある。

- ・作家の高橋源一郎さんとの対談で、「人とのつながりがなくなるということは言葉を失うということですね」と高橋さんは即答した。人とのつながりのなかで言葉が生まれ、そしてその言葉が物語になる、それが一番のテーマ、という話をした。
- ・日本の社会保障は、現金給付と現物給付を中心にやってきたが、家族や地域という人とのつながりがなくなってきた今、「物語化」「人とのつながり」「言葉をどこでつくるのか」ということを一方で議論しないとイケない。
- ・モノに人が関わることで言葉が生まれる。言葉が生まれるとそこにモノが物語化されていく、意味づけられていく。この意味づけということができるのは人間しかいない。人との関係のなかで物語が生まれていく。福祉というものは、制度を授ける、制度を利用してもらうということ以前に、職員やそこで一緒に生きていく人たちとの間につながりができて言葉が生まれて物語化されていく営みである。そのときはじめてお金や現物給付や現金給付の意味が深まる。モノを物語にかえるのが福祉。
- ・自立と自律。自律の支援は、「全て国民は個人として尊重される」という憲法第13条に基づくもの。名前のある個人として自分の物語を生きられる。幸福を追求する権利をもっている。こここのところを日本の社会は自己責任にしてきたのではないか。家族や地域が脆弱化するなかで、では誰が担っていくのかということが、今、福祉にとって大きな課題。語り部としての福祉は、絶対必要。制度を物語に変えることは、ものすごく大事で、人の生きる意欲を生み出すことだと考えている。



②続いて進行の田中さんから、「共生社会フォーラムの企画」についてお話がありました。

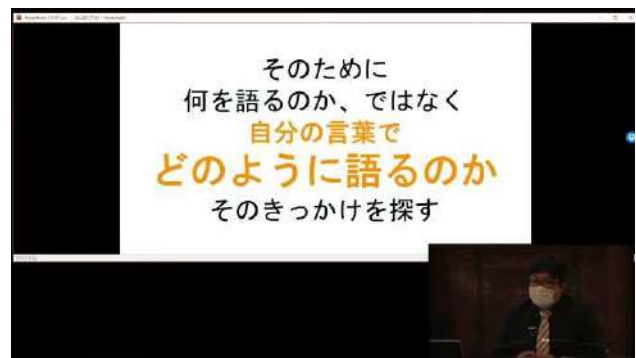
- ・共生社会フォーラムを開催するきっかけになったやまゆり園事件のことは、フォーラムのプログラムや全体をとおして出てこないが、このあとに受けていただく語り部養成の研修プログラムでは、テキストが用意されており、そのなかに、やまゆり園事件のことがきっかけになったというコーナーがある。そこには、今私が所属している育成会が、やまゆり園事件があったその日の夕方と翌日の朝、夕方には多くの方に向けて、そして翌日には障害のある当事者のご本人の方に届くようにつくった声明文が掲載されている。「障害者は要らない」という言葉が、みなさんの心に突き刺さりすぎて激しい動揺があって、その動揺を収めることが一番大きな目的だった。
- ・共生社会フォーラムをつくる運びとしては、実行委員会とワーキンググループにわかれていた。実行委員会では大きな方向性を出し、語り部という言葉もそちらからのオーダーとして養成していこうということになった。
- ・今日おられるバリバラで有名な玉木さんがワーキンググループのメンバーで、事務局が用意したシナリオどおり進めようとすると、ちょっと待ってと。そもそも語り部というのは何か体験したことをしゃべるので語り部なので、何をもって体験したとするのかという本質的な問いかけがあった。親会からのオーダーを具体化するワーキングで、その問いかけに応える形で近藤さんたちが必死になってプログラムをつくった。

③近藤さんからは、「研修プログラム」についてお話がありました。

- ・私自身は、福祉を専門としている人間ではなく、工学や経済学を専門にしている。私が学んでいた時代は、「そんな役に立つことをするな」という非常に良い時代。工学や経済学なのに、社会のために役立つのではなくて「おもしろいことをしろ」と。ただし、制度とかシステムとかモデルとかまとめたなかで零れ落ちる「特異解」などがあり、そこをどうするのかということを考えなさい、徹底的に大事にしなさいと教わってきた。
- ・変量解析などをして零れ落ちたモデルやシステムをどうやって拾うかというときに、参考にしたのが民俗学とか社会学の

分野で行われているヒヤリングや聞き書きだった。拙いながら制度などをつくっていく一方で、聞き書きをしながら、「そういうことに何の意味があるんだ」ということをずっと考えてきた。そのことが共生社会フォーラムのプログラムづくりに繋がっている。

- ・共生社会フォーラムに関わるようになって、我々が与えられたのは、「語り部を育成することを考えましょう。目的としては、実践する人材を育成していきましょう」というお題だった。とにかく何を語るのかなど、手探りのなかでずっとこの四年やってきた。
- ・最近わかってきたことは、「我々是对話できているのか」ということ。この対話というところが一つのポイント。よく知っている人や分かりあっている人と話す、価値観が近い人たちと話すのは、いわゆる会話。たわいもない話。一方で、よく知らない人や全く異なる価値観の人、あるいは自分自身にもいる他者。そういう人たちと擦り合わせることはでき、一緒になることもでき、認め合うこともできる。ただ、一番の課題は、「新しい価値観を見出すことができるのか」というところ。
- ・奥田さんから毎回講演の最後に「植松くんと話をしたあとに何を語るのか」という宿題がでる。我々は「植松くんの考えを受け入れることはできない。でも認めなければいけない部分も社会としてある」と考えるが、それを踏まえて新しい価値観というのはできるのかということが課題。これは、私自身もわからないし、みなさんもわからないし、それこそずっと考えていかないといけない。
- ・ただ、答えを探していくというなかで、もう一つ大事なことは「何を語るのか」ということではなくて、そこは、自分の体験で自分の言葉で「どのように語るのか」ということ。それを大事にしていく研修に、今少しずつプログラムが変わってきている。



④続いて近藤さんとフロアの玉木さんから「プログラム」についてお話がありました。

- ・(近藤さん) 具体的にプログラムを紹介すると、学生・新任者のほうでは、まだなかなか言葉にできないことを自分の言葉で話すのを大切にしている。想いを言葉にするまで徹底的に待つというのが学生・新任者のプログラムの特徴。玉木さんが5、6人の参加者に対して「福祉とは何か、障害とは何か、どう考えるか、その体験は何なのか」など問いかける。その場でどのように言えばいいのか、なかなか難しいところがあるが、それを徹底的に待つ。
- ・そのような形で、1テーマに対して「あなたはどう思いますか」と玉木さんが丁寧に振っていかれる。それに対して参加者がポツリポツリと言葉を紡いでいく。それを受講者と同世代の御代田さんや私が記録しながらディスカッションしていく。
- ・(玉木さん) 今年でこの企画も四年目。一年目は、大学生の人も来ていたが、平日なので学生さんがなかなか来られない。そこで最近は、入職後1年目から3年目の方が中心に来ている。これまで他の職種で働いていて途中から福祉に来た人もいたので、四十半ばぐらいの人まで新任として来ている。
- ・一日半という、たっぷり時間があるので、とりあえず自分の言葉でしゃべってもら。福祉そのものをどうしても他人事のようにとらまえて関わっている人が多いと思うので、やはり自分の事としてきちっと向き合ってもら時間としてやっている。モヤモヤを持ち帰って実践のなかでモヤモヤを解消してもら。そのようなセッションにしたい。
- ・(近藤さん)
- ・中堅のプログラムは、三つのセクションから成っている。
- ・はじめに、共生社会というものを考えていく。いわゆる共生社会というものはどうなのかと問うだけではなくて、共生社

- ・会と共生社会ではないもの、1と0だけではなくて1と0の間にどちらでもないグレーゾーンがあるということをまず確認する。奥田さんの基調講演や表現活動やラストメッセージを見ながら、どちらとも言えないものを炙り出す。
- ・次に、中堅の方はたくさん経験し、言葉も豊富で、つらつらと言葉が出てくるが、それが本当に自分の言葉であるのか、もう一度問い直してもらう。そのために相模原の事件を踏まえて内面と向き合ってもらう。答えに窮するどちらとも言えないものがあるなかで、どのように対話していくのかを考えていく。
- ・最後に、みなさんが持っているモヤモヤを語り合う場をどのようにすればよいのかを考える。この三つのパートでなっている。
- ・今年から、これまでの研修のなかで出てきた問いかけで「自分が問われたら困る、答えに窮する問いかけ」をいくつか選びグループで考えることを取り入れている。「なぜ、問いかけられた人が答えに窮したのか」ということと、「では、どのように問いかけるのか」を考え、「語りかけ」を考えていく。各人の「答えに窮する問いかけ」に対して、グループのメンバーが「どうやって語りかけようか」と考える。これを一巡したうえで、「実際に、このようなことを語る場をどうやってつくっていくか」というアクションプランを考える。そのときに一点だけ注意しているのは、「相模原の事件のときに、どのような語りの場があったのか」を踏まえること。
- ・アクションプランを考えてもらったうえで、一月後に糸賀財団から「実際にしたかどうか」を確認する。例えば、経済学部の学生に向けて福祉のことを語るなどいろいろな形で各地の語りの場が展開されている。



⑤田中さんから「語り部育成」についてお話がありました。

- ・プログラムのことと、さらにもっと伝えたかったことは、やはり「何をもって語り部になるのか」という本質的なところ。
- ・糸賀さんは、昭和20年、戦争が終わった年の翌年に施設をつくった。あの頃は、みんなが生きるか死ぬか、戦争という大災害のなかで立ち直っていく時期に、他人のことなんか構ってられないというような状況のなかで、「命が大事だ」ということを実践された。
- ・糸賀さんの足跡を含めて時代を超えて語り継ぐべきものがある。語録を朝礼で唱和しろというような研修ではなく、参加する人が自分の言葉で紡げる語録があれば、自分の基準と照らし合わせて活用するようにしている。

⑥続いて奥田さんから、「いのちと意味」のお話がありました。

- ・結構、悩みの相談の方が講演会に来られることが多い。
- ・ある方から「奥田さん、生きる意味って何ですか」と聞かれ、「生きる意味などというのは、外発的動機の話ですよ。部屋に籠って本を独りで読んでいてもわからない。だから今日こういうところに出て来ていろんな人と会われて、そんな人との出会いのなかでそういう意味づけみたいなものは知る。だからなるべく人とたくさん会ったほうが良いですよ」というようなことを言ったが、ちょっとこれはまずいかもしいと思った。
- ・一つはそんな単純じゃないということと、今言ったのは第二の言葉であり、第一の言葉があるということ。それは何かと言うと、「生きていることに意味がある」とまず言い切ること。「何のために生きているのか」から始めると、そこに答えが見いだせないと、もう既に「命そのものに価値がない、意味がない」という話になってしまう。そうではなくて、「生きていることに意味がある」とまず言い切ったうえで、「じゃあ私は何のために生きるのか」というのを他者性のなかで見出すということ。

- ・この最初の一言が、やはりこの社会で抜けてしまったのではないか。「何のために生きるのか」とか、たとえば国の政策でいろんな就労支援の仕組みをつくるのは大事だが、「人は何のために働くのか」という議論はあまりしない。孤立、孤独の時代において、やはりその議論が大事と思う。
- ・命優先という「生きていることに意味がある」と言い切れない社会で、一足飛びに「何のために生きるのか」とか、「生きていてあなたの価値は何か」と聞かれたときに、底がない議論、つまり「落ちてもここまでというベースがしっかりしていない対話」というのは怖くてできない。
- ・命ということは普遍的価値で私の命だけでは命にならない。私たちの命、彼の命、彼女の命という複数になったときに、はじめて命となる。そこをまず前提に「生きていることに意味がある」と言っただけで「関りのなかでその意味を知る」その二つのことがあるのではないかという話をした、ということをもう四年ぐらい古典落語のように毎回基調講演でお話ししている。

⑦続いて近藤さんから「メンター」についてお話がありました。

- ・ファシリテーターという言葉を使っておらず、メンターという言葉を使っている。それには意味があり、ファシリテーターと言うと、上手に進行する人のように思われがちになり、どうも違うなど。はじめた頃は、ファシリテーターと言っていたが、やっている人たちからすると、自分自身の語りが鍛えられたという話が出てくるなかで、「あ、なるほど」と思った。参加者のみなさんももちろん自分の語りを鍛え、言葉を鍛えていく。一方で、メンターの人たちも自分自身の語り、どのように語るかという力が非常に鍛えられていくというところがあって、メンターと言っている。

⑧奥田さんから「糸賀思想」と「物語としての福祉」についてお話がありました。

- ・講演のパワーポイントには、糸賀さんの言葉を引いており、私が現場で感じたことと糸賀さんの言葉を対話的にやっている。たとえば最初にでてくるのは、人にはいろんな違いがあり、たとえば障害の有るか無いかの違い。そこに着目するのではなく、結局それは全て個性、一人ひとりの個性なんだということ。全ては同心円上に存在していて、上とか下ではなくて、その同心円上のなかにそれぞれの個性があらわれる、とおっしゃっている。能力が高いとか低いとかという「縦の発達」の思考だけではなくて、「横の発達」ということからすれば同心円上にみんなが個性として存在しており、上も下もない。
- ・では、その同心円の真ん中は何なのかということをおぼろげに問われた。その同心円の中心点とは何を意味しているのかは、糸賀さんの言葉ではなくて、そこを対話的に我々が考えていく。私はそこに「命」という中心点があって、いろんな人がいろんなところに存在していて、それは個性なんだというように言ったんじゃないかというように感じたなど、いくつか糸賀さんの言葉を引きながら話している。
- ・語り部講座については、今後ますます期待している。やはり福祉というのは物語だと思う。これは何かというと、事実が確かに大事だが、時にして語るという世界も大事。自分のなかで解釈していく作業に入った瞬間に、真実という少し言い過ぎかもしれないが、事実と真実との違いを思う。事実を事実として語るということも大事だが、事実の出会いのなかから自分の実存との対話が始まって、そこからどう想像するか、どう豊かな話に変えていくか。私は、語り部というのは、そういう世界ではないかと思う。
- ・語り部ということにおいては、事実の積み重ねではない。やはりそこに想像というよりも連想する力がどこまで鍛えられるかということが大事。想像ではなく連想でないと駄目というのは、想像はファンタジーで、自分とは関係ない夢の世界。連想というのは、自分の延長線上に相手を見ている。自分の弱さとか自分の足らなさ、自分自身が求めていることなど。そこから連想を語りに変えるということがすごく大事ではないかと、この数年、語り部講座を見ながら思っている。

⑨田中さんから「今後の共生社会フォーラムの展開」についてお話がありました。

- ・今までの共生社会フォーラムでは、「福祉の思想に学び、実践し、語る人に」と、施設・福祉業界に携わる人に向けて展開してきた。糸賀財団では、来年度、もう少し横の展開を行い、福祉事業所のリーダー以外に、一般参加型のフォーラムも

することを検討しはじめている。

⑩近藤さんから「他分野と一緒に取り組む新たな展開」についてお話がありました。

- ・取り組んでいる課題に「空き家の問題」があり、「移住やりノベーション」の方向から問題解決しようとしている。一方で、奥田さんははじめとして福祉の側からも結果的ではあるが「空き家をなんとかしよう」とされている。見ている側が違うだけで同じ問題を一緒に取り組んでいることが少なからずある。
- ・就労という側面で、障害者の雇用という問題をどう考えるかというなかにもヒントがある。経済の側は、経済効果を測るうえで就職率をあげるが、では社会復帰された人たちが、社会の制度を使わずに自立した経済効果をきちんと調べたことがないのではないか、という見えていない側面をお互いで話し合うことが一つのきっかけになる。

⑪奥田さんから「官民ともの縦割り、民間交流の必要性」についてお話がありました。

- ・福祉業界や生活困窮の世界でも、行政が縦割りだと言うが、NPO も実は縦割り。自分の NPO は、制度から入らなかったのでも、子どもの支援も障害福祉もやっている。一方で、ホームレス支援や居住支援の縦割りの全国組織の代表もしており、全国規模の大会を何故一緒にやらないのかと正直思っている。
- ・障害福祉の現場にいたわけでもないのに糸賀賞をいただいたのも「横展開の発想」もつとと言うと「命の同心円性」によるもの。
- ・この国は、確実に人口減少が進み、社会資源は余りだす。制度ごとの縦割りの資源は余りだす。そうすると、もっとコンパクトに集約化し「なんでもこいの受け皿」が絶対必要になる。だったら今から民間交流だけでもやっておいたほうが絶対いい。国の制度は後から追いかけてくる。
- ・居住支援に限らず、いろんな分野でお互いが手を伸ばせばよい。ひとりが手を伸ばしても遠くまで行かないといけませんが、お互いから手が伸びるとすぐ近所で手が結ばれる。お互いが手を伸ばせば済む話がたくさんある。

⑫近藤さんから最後に「言葉の現代に合った解釈」についてお話がありました。

- ・語ることから始まることもある。福祉の当たり前は、社会の当たり前ではない。一方で、あたり前を当たり前に言わなければいけない社会が別に福祉だけに限らずどの分野でも起こってきている。是非とも皆さんには、少しでもいいので語ることから始めてほしい。
- ・工学や経済学では、矛盾を矛盾としてあるという前提で制度やシステムをつくっている。そのなかには「自分病」や欲望をコントロールするような言葉や仕組みをずっと持っていた。経済学で言う公正や保障などの原理を考えてきた。そのような言葉をもう一度、今の時代に合う形で考えなければならない。
- ・糸賀先生の言葉は、確かに昭和の戦後であるが、今の時代になってもバージョンアップされてない。現代に合った解釈が必要。経済の側からすると、糸賀先生が今の地域活性化や地域再生など様々な方法・手法で取り組んでいたという評価をしていない。池田先生なども就職斡旋したという評価ができていない。言葉もまだ解釈していない。やはり同じものを見ているのであれば一緒に考えていきたい。「自覚者は責任者」という言葉もあるので、語り部としての皆さんと是非ともこれから一緒に考える機会をいただきたい。

⑬奥田さんから最後に「反対のかたち・語り部の醍醐味」についてお話がありました。

- ・語り部や解釈、釈義の一番の醍醐味は、真反対のことが言えるということ。事実ではないが全く逆のことが言える。宗教改革者マルティン・ルターの思想の中心は「反対のかたち」。もし命を探そうとするのならば死のなかを探せ、光を求めようとするのならば闇を探せ、全く反対のものなかにそれはあらわれていく、という「反対のかたち」をしきりに言っている。語り部の醍醐味はそこにある。
- ・「楽なことが幸福なのではなく、困難を乗り越える苦労が本当の幸福だ」という糸賀さんの言葉がある。困難を乗り越えるというといかにも根性物語みたいになるが、ここにやはり出てくるのは「反対のかたち」。植松くんは、非常に順接的な思

想に囚われた。つまり彼は「現場がしんどいから大変だから不幸だ」「障害者は不幸だ、あるいは家族やまわりを不幸にしている」と言った。それは現場が非常に疲弊しているという事実が一方ではあるだろうが、イコール不幸ではない。そこに連想力もなければ想像力もなく、語り部としての能力がなかったとしか言いようがない。

- ・私の教会に礼拝に来られる人のなかに娘が交通事故で脳に大きな障害が残った娘さんを40年間ずっと支えてきた80代後半の母親がおられる。彼女は「障害者は不幸しかつくりたくないあの犯人は言ったけれども、そんなの嘘だ」「私は娘に不幸にされたなんて思っていない。あの人は嘘をついている。私は不幸ではない。」と言って泣いた。しかしそのあと彼女は「でもこの40年ものすごきたいへんだった。たいへんだけど私、娘と生きて幸福だった。」と言い切った。その言葉を聞いて、この人語り部だと、本当に思った。人間の底力っていうのはこういうところにある。彼はそこがわかっていなかった。
- ・糸賀さんはやはりそのことを言っている。「楽なことが幸福なんじゃなくて苦難のなかに幸福、本当の幸福がある。めいめいの体験のなかで味わってみて、そういう幸福をたくさん見つけてほしいと私は思う」と書いている。

最後に進行の田中さんから「それぞれの言葉がみなさんに共感をもって届けられたらこのシンポジウムは成功だったと思います。」と会場の参加者とシンポジストの二人に感謝の言葉があり、幕が下りました。



シンポジウムで、一般参加のプログラムは終了し、全体フォーラム特有の「実践報告・交流会」が研修プログラムと並行して、開催しました。

「実践報告・交流会」では、これまでの共生社会フォーラムに参加した方や関係者がZoomでつながり、受講後の実践報告や今後の活動の抱負など、シンポジウムでも登壇された近藤紀章さんの進行により、メンター経験者の大平眞太郎さんと奥村昭さんが助言者として参加し、意見交換しました。参加者と主な発言は、次のとおりです。

〔参加者〕

- ・大阪府河内市長野市など 社会福祉法人ぬくもり理事長 鬼頭さん 2019年兵庫フォーラム参加
- ・熊本県 放課後等デイサービス事業所にじいろ管理者 白石さん 2021年度熊本フォーラム参加
- ・宮城県 社会福祉法人なのはな会こまくさ苑施設長 加藤さん 2020年度仙台1日研修に職員が参加
- ・岩手県 岩手県社会福祉事業団たばしね学園園長 白畑さん 2019年度岩手フォーラム等に参加
- ・北海道 帯広市自立相談センターふらっと 高須さん 2021年度北海道フォーラムに参加
- ・熊本県 社会福祉法人清和つくしの里 木場さん 2021年度熊本フォーラムに参加



[受講後の実践報告]

- ・ 鬼頭：実は、糸賀さんのラストメッセージは、登場人物全員言えるぐらい、死ぬほど私が録画してあるのを見ていた。が、研修で非常に大きかったのは、やっぱり1日目の午後と2日目のあのセッションのところ。いろんな切り口で、共生社会というものが決められたものでなく、これは共生社会なんじゃないか、そうではない、どちらとも言えないという枠にわかれたものであるというのが、自分のなかでは非常に大きい気づきだった。早速、自分の法人のなかで、ワークをした。
- ・ ラストメッセージを見ていたとしても、いざ具体的に「これが共生社会なんじゃないの、それは反しているんじゃないか、どちらとも言えない」というセッションは、本当のそれぞれの気づき、モヤモヤしたところがたくさん表出されたワークになった。結論は出ないが、ただ、あのときの「誰の中にも差別はあります」という言葉が最終的にそのワークの落としどころになった。そういった思いで日々支援していくことや、ワークを定期的に行って、みんなで確認していくことが必要と思った。
- ・ 加藤：常勤職員に限って階層別に研修をしており、2時間の研修のなかで1時間ラストメッセージを見て、そのあとにグループワークでその感想とか共生社会について議論をするという研修をしている。プレゼンター・講師として各施設長がこれまでの自分の想いであったり、これまで経験したことを語るという研修も実施している。私自身、全部の研修に参加していて、ここ数ヶ月で10回以上は見ている。
- ・ 職員が昨年参加して帰ってきたときには、ものすごくモヤモヤした顔をして帰ってきた。それがどのように解消しているのかは実際聞いていないので、どう変化したのか本人に聞いてみたい。
- ・ やらなければいけないことはたくさん出てきたような気がする。施設以外のところに向けてアプローチしなければいけないという想いはすごく強くなった。
- ・ 白石：まだ職場のなかでみなさんに研修に参加した話はなかなか深いところまではできていない。語りかけの実践の研修でいろいろなグループの方の問いかけに対する答え、語りかけの仕方をまとめた資料がちょうど先週に戻ってきたので、「どういう語りかけの仕方があるのか、どういう考え方があるのか」を知ってもらいたいと思い、それを職場の先生たちにも見てもらった。
- ・ 反応としては、もちろんモヤモヤもされたと思う。新しい考え方としては、「いろいろこういうこともある、こういう伝え方がある」ということはものすごく感じてもらった。「実際にそこまでできるのか、この言い方はどうかなとか」という意見がたくさん出た。
- ・ 高須：共生フォーラムの研修を受けるとき、モヤモヤがすごくあった。職場に戻ってきても、研修と一緒に参加した人がいない分、誰に言っているのかがよくわからなかった。でもそれを隣の席の先輩などに話をすると、「わかる。わかる。でもモヤモヤして結局解決しないね」のような話になった。
- ・ 日々の業務におわれて、共生フォーラムに参加したそのモヤモヤが、どこかにいってしまっていた。でも戻ってきたワークシートを自分で見直ししていて、またモヤモヤが復活した。そのモヤモヤが復活したときに、「モヤモヤするのは悪いことじゃない、ずっとちゃんと考えながら相談支援をしなければ」と思った。
- ・ たまたま刑務所から出てきた人の相談員さんが来られた。私の職場は、私を含めて4人で諸先輩方もいらっしゃる。「刑務所から出てきた人は、いつもこの施設に行くんだ」というような決まった流れがあったらしく、今回もそのような感じだったが、「なんで、そんなふうに決まりきったことしかないんだろう」と疑問に思った。それが間違いかどうかかわからないが、一応自分の意見として、「そこにいくのが、正しいのか。違う道はないのか」「本人さんが本当はどう思っていて、そこに行きたくないかもしれないし、望んでいくかもしれないけれども」ということをまた改めて職場で話げできた。結局、結論から言うと最初の案だった施設のところに行ってしまったが、でも職場のみんなでもヤモ

ヤして改めて話げできたのが私にとってはすごく良かったなと思った。

- ・白畑：2年前、最初に岩手でメンターをやってから、何か自分でもできることはないかなということで、職員向けに伝達したり、職員向けの人権教育や虐待防止研修で折に触れてやまゆり園事件のその後のことを取り上げた。施設にさまざまな問題があったんだよっていうことを伝えながら、自分たちだったら植松にどう答えるのかという形で考えさせたりした。
- ・年に1回2回の職員向け研修で伝えるぐらいが精一杯だったが、もう少し対象を広げて話す機会としては、実習生へのガイダンスのなかで施設の概要プラス共生社会についての講義を組み入れた。保育実習できた学生には、「共生社会と呼べる、呼べない、どちらとも言えない」のシートを使って1時間ぐらい書かせるというのを繰り返している。
- ・介護福祉士養成の学校で、「障害の理解」という基本的な授業を1コマ持っていて、そのなかでも学生には同じようなワークをさせている。結構、学生たちの反応が面白いと感じていて、やっぱりこういうのは学生のうち、若いうちにいろいろと事実はどうだったというのを伝えることが大事だと思った。「偏見があって当たり前、自分にもあるでしょ」という話ながら、若い人たちに少しずつ伝えていけばいいのではないと思う。自分のできる範囲は、半径5メートルというか、自分のフィールドのなかで何ができるかということで今やっているところ。
- ・今年メンターで参加したが、正直こういう機会が訪れるとは全然予測していなかった。学生や実習生、職員に絶やさず話つづけていてよかった。自分のなかの温度が下がっていなかったのも、良い状態で参加できた。また新たな刺激をいただいた。助言と言うとすごくおこがましくて、一緒に勉強させていただいた。
- ・木場：虐待防止の研修や業務改善のなかで、共生フォーラムでやったようなことなどを活かしながらしなければと思うなど、自分のなかでは少し変化があった。私自身もそうだったが、職員などが、あまり共生社会のようなことについて考える機会がない。今年に伝達研修することは少し難しそうなので、これから来年の計画を立てるにあたって、伝達研修を入れようかと思っている。
- ・受講生の変化については、モヤモヤしていたのが、結構、「あっ、これも共生社会に関係することだったのか」など、つながりとか視野の広がりなどが見えてきたのではないかと感じて見ていた。
- ・団体を超えた連携については、何か協同してできれば良いと思う。勉強会など中心となって何か行っている施設が近くにあれば、地域ぐるみでできると良いと思う。
- ・大平：滋賀県で仕事を始めたのは、糸賀先生の本がきっかけ。以前から糸賀一雄さんたちがやられていた取り組みや残された言葉などに触れたり意識する機会は多い。
- ・共生社会フォーラムは、糸賀一雄さんたちがやられてきたことや残された言葉から我々が学んだり、言葉を引用させてもらうことで人に語りやすくなるということも含んだ研修。私にとっては、やはり滋賀なので糸賀一雄さんが中心になるが、みなさんにとっては自身でつくった言葉もあれば、先輩方が何か喋ったこともあれば、地元の福祉に限らず先達の方がおられる。そのような方々の言葉も活用しながら、それをどのように自分として解釈をして、共生社会や障害がある人を社会として支えることの意味や意義を語る、ということも今回の研修の目的だったと思う。
- ・語るための場を設定していくというのが具体的な取り組みになるが、何か具体的な取り組みまで行かないとしても、周りの人としゃべることが少し変わる、何か意識しはじめたというようなことが、みなさんのなかであれば良いと思う。
- ・自覚者は責任者っていう言葉はとても使いやすい言葉。「何か気付いて、それいいね、と自覚したら実践することにつながるね、ということ糸賀一雄さんという人が言っていて、そうやって社会を変えていったんだよ」という話ができる。場をつくるということだけでなく、先ほど発言があった「隣の先輩と少し話をしたんだ」というようなことを一つひとつ増やすということも、今年度受講された方には、特に意識してもらえるとよい。
- ・近江学園やびわこ学園の先輩方の話を聞くと、昼間仕事をして夜な夜なみんなで一升瓶をかついで寮に集まってきて、「今日はあの利用者さんこうだったよね」とか「あの園生さんこんな表情見せてくれて、あれはたぶんこういうことを

思ったと思うんだ」のようなことを共有して、「じゃあ明日こんな取り組みをやってみようか」のようなことを話あっておられたそう。そういうのがすごく羨ましいなと思っていた。今の世の中、そういうことが出来にくいと思うが、私自身、通所施設で仕事をしていたときなどは、仕事が終わってから休憩室でみんなで同じような話をしたことが積み重なって、「本人さんはどう思っているんやろ」という言葉をみんなで考える機会が毎日ちょっとした時間にもてたりもしていた。何かそのような場をつくるまでいかなかったとしても、そういう小さな機会を増やしてもらえるとよい。

- ・奥村：今の太田さんのお話を聞いていて、30数年前に第二びわこ学園の職員だったときのことを思い出した。滋賀県野洲市にある移転する前の第二びわこ学園に男子寮、女子寮という職員寮があり、男子寮に集まって、一升瓶などを囲んで、大先輩の職員から私のようなペーパーから実習生やアルバイトまでが、夜中まで、療育のあり方であったり、実際に自分たちが関わっている園生さんのことについて語り合っていた。
- ・あえて何か場を借りて準備してというよりも、語るとか語り合えるといったことの、そういうほんの小さな機会、ひよっとしたら1分でも5分でもいいのかもしれない。5分とか10分とかでもいいのかもしれない。何かふと気づいたときとか、あるいは自分の琴線にぴんとひっかかって「今語る瞬間かな、語るチャンスやね」といったようなものがあると思う。このフォーラムに参加していて、なんとなくそういうことが自分の意識のなかでも潜在化されている気がする。
- ・あるときふと「今、語るんや」というのが出てくると思う。研修の場などでなくてもいい。OJTの一環とは言えないかもしれないが、そのような場と空間が意図的にできればいいと思う。その瞬間というのはきっとこのフォーラムに参加した方々でしたら、「あっ、今ここや」というのがなんとなくわかるかと思う。
- ・この4年間は、すごく自分自身にとって学びの機会だったが、ずっと4年間モヤモヤし続けているので、正直言うとなかなかしんどい。しかし、今日も話があったように、絶対モヤモヤはあったほうがいいと思う。絶対モヤモヤは無くない。そのモヤモヤに向き合う時間が、たとえば1年間のうちにどれだけかということが積み重なっていくこと自体が、ひよっとしたら自分のなかの、正解はないのかもしれない。
- ・モヤモヤを探求し続けることがひよっとしたら専門職であったりとか福祉人といわれる人のその姿なのかなと思ったりもしている。きっとそのモヤモヤは絶対晴れないと思う。モヤモヤを持ち続けること。それに対して蓋をすることはなく、モヤモヤを直視していくということ自体が、ひよっとしたらその専門職といわれるために必要なかなと思った。
- ・最後に、午後のシンポで奥田さんの話がすごく印象的だった。本当にそうだったのが、「ものを物語に変える」という言葉。たとえばホームレスの方にとっての「餌とお弁当の違い」について、本人にとってこれが餌だということの意味があると思う。同じ事柄であるが、どういう表現で言うのかという背景、本人にとっての言葉が持つ意味を、対話のなかで考えていけないといけないと思った。改めて「ものを物語にする」という言葉の大事さ。言葉をどのように自分のなかで考えて使っていくのか、ということをは今日は深く考えさせられた。

[今後の活動の抱負]

- ・鬼頭：先ほど糸賀先生のラストメッセージを死ぬほど見ているという話をしたが、前職場の大阪のコロニーで務めているときに糸賀先生のことを知ってすごく感銘を受けて、ラストメッセージを録った。NPOの立ち上げ当初から毎月一回ラストメッセージをスタッフと6年ぐらはずっと見ていた。だから本当にみんなで「河瀬に銭湯が今でもあるのかな」とか「光輝くん元気になっているのかな」とか、あの番組を見て心に残ったことをシェアするというのをずっとやっていた。今も新人職員には必ずあの番組を見る研修をしている。コロナも少し落ち着くのかどうかかわからないが、法人内でずっとあの番組を見て、みんなで権利とは何か、命とは何か、福祉とは何かというようなことを話している。一般の方とか、福祉以外の教育、保育、また地域の市民の方に対して、研修という言い方をするとなかなかハードル高いかもしれないが、あのラストメッセージを使って共生社会を考える、共に生きるを考える、といったイベントを定期的にやっていきたいと思っている。
- ・不安に思ってビデオ録画を研修で使っているのかとNHKに電話して尋ねたら、あくまでも録画したものは個人で見るためのものなので、法人で使うことはよくないと言われた。だから、なおさら地域の人とか一般に向けてというのは難しい

と思ったが、糸賀財団にNHKの福祉ビデオライブラリーに登録したら大丈夫ということを教えてもらい、この前登録した。堂々とそのDVDの映像を使って今年度中には一度やりたいと思っている。

- ・加藤：全施設の年代別に分かれて研修をしているなかでラストメッセージを見ているが、まだ全員見終わっていない。同世代と感想を語り合ってくるが、こまくさ苑としてそれをどう感じるかという語り合いもしたい。
- ・自分が入職した当初、支援員として関わってきた人たちが一緒に年を重ねているが、その方たちが若い頃どういった生活をしてきたかということを今の若い職員たちは知らないの、そういった利用者一人ひとりの歴史や家族が歩んできた歴史とこまくさ苑として歩んできた歴史を少しずつ私なりの語りで語っていききたい。

→近藤：今の話は、すごく面白い。当時の関わり方や支援のあり方ややり方が今ならどうなのかと考えることもできる。当時支援で関わっていた人たちがそこで今語ることによって、奥田さんのいう物語になっていく。こういう人がいたよというところがすごく大事なところ。そういった匿名の人ではなくて、この人がいたということにつながっていく可能性がある。こまくさ苑特有の特徴が見え、すごく面白いなと思ったので、また、こういうことがあったと紹介してほしい。

- ・白石：研修が終わってまだすぐというのものもあるが、研修の最後の方で、アクションプラン・語りの対象というのを自分たちで計画したものを、とにかく今年度中に職場のスタッフの方たちとできればいいと思っている。先ほど言われたように、研修という場をつくることももちろん大事だとは思いますが、やはりちょっとしたタイミングで語り合う、お互いに気持ちを伝えるということは、今後も意識して取り組んでいきたい。
- ・アクションプランでは、伝えたい相手は職場の先生たち。参加して本当に思ったのが、「共生社会」については、聞いたことはあるし漠然としたイメージはあるが、「共生社会ってこんなに身近にある」ということを伝えたい。「それが共生社会か共生社会じゃないのか、どちらとも言えないのか」というワークをしているときに、「あっ、確かにそれも共生社会」ということのほうがものすごく多かった。あたりまえにあることだと思っていた部分が実は共生社会だったり逆に共生社会じゃなかったりというのがものすごく大きかった。

- ・高須：やってみたいことが2つある。1つが、私はアクションプランで伝えたい相手が娘と娘の友だちに設定し、実施済み。娘は今高校三年生で受験を控えていて、今後、世の中に出て社会人になるというところなので、今の若い子に聞いてもらいたいと思ひ話をした。結局、娘と娘の友だちと私という小さな設定でやったが、娘も娘の友だちも若いなりに考えてちょっとモヤモヤしてくれた。結局、解決はしていないが、高校を卒業して半年ぐらい経ったときに、その心境が変わったかどうかというのをもう一回聞いてみたい。

- ・もう1つが、生活困窮者の方に2か月に1回お弁当を配布するボランティアをしているが、昔来ていたが来られなくなった方々がいるらしい。その方々の居場所が結局よくわからなかったりするが、もう一回、どこかにつながっているかどうかというのを明らかにしたい。それこそ伴走支援ではないが、もしかして途切れてしまっていて、保護とかつながっていたらいいが、つながっていなかったり、ひとりぼっちになっていたら心配、というのがあるので、またそこを掘り返してみたい。

- ・白畑：とにかく小さいことでもコツコツ継続するのが大事と思っているので、あんまりイベント的なものは少ないが、頭の中では地域のみなさんや隣の支援学校の先生たちなどを巻き込んで、たとえばラストメッセージのビデオを見るなどの企画をやってみたい。ただ、なかなかこのコロナで地域の祭りなどイベントができない状況で現実的じゃないかもしれない、やはりできるところからということで考えると、今年、奥村さんが編集した糸賀先生の語録を地道に職員にまずは浸透させたい。今、週一回月曜日の朝礼でいろんなコンプライアンスのことなどミニ研修としてやっているが、来年はぜひこの糸賀語録を毎週一つずつでもやっていきたい。一年間ほどで一通りいくと考えている。息の長いと言うか、ずっとやっていかなければいけない取り組みと思っている。

・大平：みなさんから今聞いたことも参考にして、自分の法人や地域で取り組みたいと思っていることを一点だけ、糸賀先生に関連する話をするときに、最後にお伝えしていることをみなさんにも紹介したい。さきほど少し出てきた「本人さんはどう思っているんやろ」というのは、糸賀先生と一緒に取り組まれた岡崎先生という医師でびわこ学園の初代園長の言葉。その岡崎先生は、「我々の役割は、たかだか 200 人や 300 人の重症児の命を若干の時間引き延ばすことに尽きるのではない。これはほんの糸口に過ぎない。それは結果としてやってくることであっても目的ではない。我々は重症児の療育という活動をとおして、一つの社会的価値を追求し、実現するということを確信している」と仰っている。要するに、目の前にいる一人ひとりの利用者さんのことを考えながらその人を支援する、それを地域の人を巻き込みながらみんなで支援をしていくということをやり続けていくことが新しい価値、社会的な価値を生み出していくのではないかということ、もう何十年も前に重症心身障害児のある子どもさんへの取り組みのなかで仰っている。やはり我々は、実践者として目の前にいる方をしっかりと支援していくというのが一番の役割ではあるが、しかもそれを通じて社会を変えていくことができると思っている。場づくりもそうだし、日々の支援でもそのような視点を持ちながら日々やっていきたいと思っているので、そのような思いをみなさんと共有したい。

・奥村：このフォーラムのもう一つのモヤモヤは、アクションプランの後はどうなっているのだろうかということだった。少なくとも今日このセッションで参加した方が、すでにずっとやっている方もおられ、それぞれの場が日本のなかであるのだと知って、すごく、これはスツキリした。もう一つ、事務局が令和元年度と令和二年度の受講者に語りの場をいつどのようにするのかというアンケートをして、その結果、63 の場が既に持たれたり、今後持たれるということが今日データを見てわかった。これはすごく素敵なことだと思う。ぜひこの研修を受けて語りの場を実践された方が、このフォーラムのメンターやアドバイザーとして参加されたら、この研修のもう一つの意味があると思う。ぜひ我こそはという方がおられたらよろしくお願ひしたい。

近藤：自法人だけではなくて、全然分野の違う私のような人間や幅広い人たちと考えていくことが大事。全国津々浦々の会場でお会いできることを楽しみにして実践報告・交流会を終わりたい。

全体フォーラム特有のプログラム「実践報告・交流会」と並行して、近畿・東海・北陸ブロックの共生社会フォーラムの研修プログラムを開催しました。研修参加者は、新任者グループと中堅職員による語り部養成研修グループに分かれて、2 日間のグループワーク研修を受講しました。



学生・新任チームの初日には、7 名の参加者が集い、バリバリの玉木幸則さんと、(社福) グローの御代田太一さんが進行を務めました。自己紹介をじっくり済ませたうえで、一般プログラムの振り返りを行いました。すでに 10 年近い福祉業界での職歴の方も多く、また他分野からの転職者、障害のある人の文化芸術活動の発信の仕事をしている方、多様な立場の参加者もいらっしや、「新任」という響きからは想像できないような活発で鋭い意見が飛び交いました。

語り部養成研修には、三世代にわたる福祉事業所を運営する法人の理事長、認知症高齢者グループホームの管理者、放課後等デイサービスの代表者・児童指導員、障害者の生活や就労を支援する事業所の主任、救護施設のグループリーダーや生活支援リーダーなど多彩な職種の人 9 人が集いました。密を避けるため受講者は、1 グループ 3 人までと人数を限定し、3 つのテーブルに 1 名ずつメンターを配置しました。ワーキンググループ (WG) により開発した研修プログラムに基づき、とんがる

ちから研究所の竹岡寛文さんが、ワークシートとスライドを用いて進行しました。メンターには、昨年度の兵庫会場でメンターを務めていただいた〔社福〕西宮市社会福祉協議会の増田真樹子さんと中山猛さん、初年度の鳥取フォーラムなどでメンターを務めていただいた特非)あかり広場の渡部真哉さんの3名がグループのテーブルにつきました。また、実行委員会委員で座長代理の久保厚子さん(〔一社〕全国手をつなぐ育成会連合会会長)、シンポジウムで登壇されたWGリーダーの田中正博さんおよび〔社福〕グローの斎藤誠一さん(救護施設ひのたに園園長)が助言者として参加し、運営をサポートしました。

最初に、言語以外のコミュニケーション手段により誕生の月日順に並ぶ、という恒例のアイスブレイクでグループメンバーの関係づくりから始まり、初日は、①基調講演等を見て感じたこと、共生社会とは何か等の個人ワークと模造紙とポストイットを使用してのグループ共有、その状況についての発表がグループごとに行われました。



初日のおわりには、翌日のセッションに向けて、相模原障害者殺傷事件を振り返り、様々な意見や価値観と向き合う時間を持ちました。研修テキストには、事件直後に発せられた全育連のメッセージとそれに対する手紙やメールの内容や、事件を丹念に追って報道した神奈川新聞の記者懇談会記録を掲載しています。全体進行の竹岡さんから、「テキストの相模原事件に関する資料を読み、あなたが気になった部分をアンダーラインやふせんなどでチェックしてください。また、そこからいくつかを取り上げて、内容やポイントを整理し、なぜ気になったのかも含めてシートにまとめてください。」との説明があり、初日の幕を閉じました。



二日目は、恒例のアイスブレイク「かたちをことばに、ことばをかたちに」で、視覚を使わずに情報(カードに描かれた図形)を伝える体験と、体と心の調子を両手で表すチェックインがありました。プログラムは、②やまゆり園事件をどう受け止めるのか、全育連の声明への反応に対して各自が思うところをグループで共有することから始まり、自らの感情の源泉を探り、答えに窮する語りかけを行うセッション ③職場や地域で取り組む基本理念普及のアクションプランを各自が考え、

グループでブラッシュアップするセッションが行われました。



アイスブレイク (かたちをことばに、ことばをかたちに)



コンディションチェック (右手は体の調子、左手は心の調子)



2 日目午後のセッション開始前に学生・新任者と中堅職員の皆さんが合同で写真撮影を行いました。受講された皆さんの清々しい笑みが、モヤモヤ感を抱きながらも、明日からの行動につながる手ごたえを感じたことを表しています。



新任者グループは、新たに学生 3 名と、社会人 1 名が参加され、計 11 人での 2 グループに分かれてのワークでした。「障害とは?」「福祉とは?」という普段使い慣れている言葉の意味を問うことからはじめ、「何をもって共生社会と呼ぶか?」という今回のフォーラムの真に迫る問いを考えました。学生たちの存在やフレッシュな意見は、全体にいい刺激をもたらし、最後に 2 日間の感想を述べあう場面では「ここに来る前は、共生社会について自分の中に確固たるイメージがあったのに、2 日間を通じて逆に分からなくなってしまった。でも新たなステージに行けた気がする。」といった声も聞かれ、このフォーラムの意義を参加者でしみじみと共有できました。



進行：御代田



進行：玉木

中堅職員グループの二つ目のセッションでは、自らの感情の源泉を探り、答えに窮する語りかけを行いました。終了後、助言者の大平真太郎さんからお話があり、「自分自身、支援の仕事をしていくうえで大事にしている言葉が二つあり、「この子らを世の光に」という言葉と「利用者さんはどう思っはんのやろ」という言葉。これが何故大事かと言うと、命というのは本当にかげえのないもの。かけえのないものというのは、基本的にもう輝いているもの。その輝きを増やすとか磨いて輝かせるとかではなくて、輝いているものに気づける社会をつくるというのが「この子らを世の光に」という意味。障害のある人を輝かせるわけではない。輝いているものに僕らが気づかなければいけない。みんなに気づいてもらわなければいけない。そのきっかけをどう作っていくのか。昨日も見てもらったパフォーマンスやアートというものがきっかけになりやすい。もう一つ「利用者さんはどう思っはんのやろ」これは、言葉もない重症心身障害のある人への支援活動から生まれてきた言葉。要するに、言葉がないので発してくれない、伝えてくれないのだけれども、この人はどう思っているのかということ相手を立場に立って、相手の身になってどこまで考えられるかということ問われている。本人主体ということや誰もの命に輝きがあるということにみんなが気づけて、その気づけたうえで相手の立場になってきちんとやり取りができる。その人の個人ではどうにもならないしんどさ、たいへんさを社会できちんと気づいて支え合っていくことができる、というのが、僕としては共生社会なのではないか、共生的な理念をもった社会なのではないかというように思う。そこを目指すのがこのフォーラムなどであるが、そこを目指していくうえで必ず出てほしい結果が一個ある。それは、相模原のような事件がもう起きないということ。共生社会ということを僕らが目指していくうえで、その結果は出していかなければいけない。巷、職場、社会から出てくる「問いかけ」に我々是对峙し、我々が「語りかける」ことが目的を果たすための一つのきっかけになっていくので、そのトレーニングを今からしていただきたい。」という参加者へのエールがありました。



中堅職員グループの最後のセッションでは、研修終了後に職場や地域を対象とする語り部活動のアクションプランづくりに取り組んでもらいましたが、終了後、助言者の奥村昭さんから、「昨日の午後に実践報告・交流会に参加し、今日みなさんも取り組んだアクションプランをどのように実行したかという報告を聞き、興味深いものがあった。少し紹介するが、一日目で行った「共生社会、どちらでもない、共生社会ではない」というワークを職場でやって、職員にモヤモヤしたところというものが表出されてきたという報告があった。定期的にこのワークをやっていて、実習生のガイダンスでも施設の紹介とこのワークを実習生さんと一緒にやってみて、学生の反応を興味深く見ているのだという報告もあった。また、糸賀先生のラストメッセージを職員の会議や職員研修で毎回見せているという報告や、週に一回の朝礼のときに、糸賀語録をひとつひとつ紹介していきたいという報告もあり、非常に興味深い実践報告・交流会だった。事務局がアクションプランをその後

どうしたかというアンケートを取っており、回答のあった63名のうち、「何月何日にどこでやりました。何月何日にやりませぬ」という回答があったのが56名だった。今日のこの経験を踏まえて、昨年、一昨年度の二年間にわたる受講生が、それぞれ全国各地で56の語りの場をつくっている。このことが何よりもこのフォーラムにとって一番大事なことだと思う。また、今日、完全にそのアクションプランを作り込むことはできなくていいと思うが、今日がスタートということで、ぜひ一つでも小さな一歩を踏み出すことができれば、それこそこのフォーラムの目的が実現できると思う。一つでも多くの語りの場ができればいいと思う。」という参加者への期待を込めたお話がありました。

また、奥村さんからは、地元を代表して「この二日間あらためてプログラムに参加して下さったみなさま方にお礼を申し上げますとともに、西宮のフォーラムを踏まえて今回メンターとして参加いただき、参加者のみなさま方に寄り添っていただいたメンターの方々に対してもあらためてお礼申し上げます。どうもありがとうございました。また、全ての関係者の方々にお礼を申し上げますとともに、昨日は雨でしたが、今日は国宝彦根城よく見えますので、全部のプログラムが終わりましたら、少しでも散策して下さるとありがたいと思います。本当に二日間みなさまお疲れ様でした。」と参加者と関係者へのお礼の挨拶がありました。

フォーラムの閉会にあたって、WGリーダーの田中正博さんから「この二日間、みなさんの参加により研修が充実した内容であったことに感謝します。この研修は、たとえばサービス管理責任者や相談専門員の研修と違って、何らかのスキルアップをするというよりも、自分の価値観を掘り下げて福祉に対する想いを改めてみんなと共有するものです。特に職場のみなさんと語りの場を持つということにおいては、一緒にやっていく仲間としての価値が上がっていくのではないかと思います。先ほど実践事例が報告されましたが、この研修を受けて感じたことを実際にみなさんと一緒にやってみましょう、身の丈に合ったところからやってみましょうということで、最後につくったアクションプランによって、仲間をつくるころに辿りつけばよいと思います。「ちょっと背伸びして」とプランを立てるときにはお伝えしましたが、日々の日常で無理のない範囲で進めていただくということも重ねてお願いします。二日間のみなさんのこの研修に参加していただいたことでの何か糧になればということでお伝えさせていただきました。語録を時々見て、語りの場を持つということが語り部の第一歩だと思いますのでぜひ実践していただければと思います。二日間、お疲れ様でした。ありがとうございました。」という閉会の挨拶があり、全てのプログラムが終了しました。

今年度のフォーラムがコロナ禍のなかで、日程が遅れながらも10月のとちぎ帯広でスタートし、11月の群馬と熊本においても成功裏に終え、今回、12月に滋賀フォーラムと全体フォーラムを開催することできたのも、これまで熱心にプログラムを考え、実施を支えていただいた新・旧実行委員会委員やワーキンググループの皆さんと講師や受講者のみなさんとともに、何よりも絶大なご支援ご尽力をいただいた全国の協力法人やメンター・助言者の皆さんのおかげです。また、素晴らしい会場を提供していただいた国立大学法人滋賀大学のご厚意に対して、言葉では言い尽くせませんが、心から感謝を申し上げます、報告といたします。

ありがとうございました。